高齢者をとりまくコミュニティの実態（鹿児島県霧島町の事例）その5
-高齢者のつきあいと地理的条件からみた生活支援-  

正会員○吉川 恵子***
同 友清 貴和**
同 雨丸 久徳***

1. はじめに
本稿は、前篇に引き続き、高齢者の日常のつきあい内容の分析と、さらに地理的条件との関係から地
域地方の高齢者の生活支援の要因を考察したものである。

2. 調査結果と分析
2-1. 日常のつきあい内容
2-1-1. つきあいの相手の年齢と人数
つきあいの相手の半数以上が10歳以下の年齢差
であり、一方、40歳の年齢差の人とのつきあいも多い
られる。つきあい方については、特に後期高齢者は
年齢の離れられた人に「してもらう」ことが多く、「元
気さを許してもらう」、「車を乗せてもらう」、「力
仕事をしてもらう」、「緊急時に頼りになる」等多面
的に支援されている。後期高齢者と前期高齢者のつ
きあいの相手の平均値は3.9人と4.9人と、単身
高齢者と、それ以外の人とのつきあいの相手数は4.0
人と4.5人である。全体平均は4.3人である。【表1】
また、相手との関係で最も多くは（複数回答）、
全体では「近所」（41.1%）である。

2-1-2. つきあいの内容項目と相互関係と頻度
つきあいの内容は精神的なものと物理的なもの
がある。全体の90%近くの人々が「元気さをかけたり
様子をみたり」しており、その頻度は「はね毎日」
（54.3%）、「1、2回/週」（32.6%）である。また、「作
った花や野菜をあげる」、「料理や手伝いもののに
すそ寄せ」という物理的なつきあいも多くされて
いる。【表2】

2-1-3. つきあいの相手の居住地
つきあいの相手の居住地は集団内に多く、つきあい
は近所単位でよくされている。
①幹線道路沿いに集団が広がり、近隣集団へのアクセスが容易な松木場では、集団全体のつきあいの相
手数84人のうち、集団外のつきあいの相手数が15
人でそのうち14人は近隣の集団居住である。【表3】
回答者の間隔は、「以前近所だった」、「親戚」、「同
級生」がそれぞれほぼ同数である。
②国道から300〜400m入り込んだ所にあり、一部
急斜面が、他集団に通じる道路のない魚眼では、
車は集団内の通りまでしか入れない。集団外のつき
あいの相手数は2人（電話使用）である。

2-2. 集団内・外のつきあいの比較
2-2-1. つきあいの相手の人数と関係
回答者92人中、集団内・外の両方につきあい人を
あげた人は（34/92人）（37%）で、そのうち9人は
単身高齢者である。複数回答で集団外の相手の数
の合計は69人。そのうち「片寄ってあげる」「して
もらう」「相互に行う」という関係にある人の合計は67
人で、友人の氏名だけあげて、つきあい内容の記
述がなしが12人である。
集団内・外のつきあいの相手の平均数は、各3.5
人、2人である。集団外の相手数を集団別に比較す
ると、市崎本場、松木場、野間場が多い。この3集
団は他の4集団と異なり、平地場と緩勾配地からな

A Study on the Community of Elderly people(using Kasasa-cho in Kagoshima prefecture as a Model)part5
The aspect of the living support for the elderly people from the view of the contact for elderly people by neighbor and the geographic conditions.

FURUKAWA Keiko, TOMOKIYO Takakazu and YUKIMARU Hisanori

---739---
る平面的な広がりがあり、隣接した集落がある。
34人の住民数と、つきあいのある相手69人との間柄は（複数報告）、「親戚・兄弟姉妹」と「その他」（夫のつきあいのある相手・息子同姓等）、「以前近所」が多い。集落内では「近所」（48.9%）、「親戚」（31.1%）である。集落により間柄の内容が異なる。市崎木場は野間池とともに「親戚」が多い。
集落外とのつきあいの集落内のつきあいの間柄の違いは、集落内では「近所」（48.9%）、「親戚」（31.1%）に対して、集落外では、「親戚」（38.4%）、「以前近所」（12.3%）であることである。
2-2-2. つきあいの内容項目と相互関係と頻度
集落外とのつきあいと最もよく行われている行為は、多いほうから順に、「元気な声をかけたり」、「話をしたり」、「手伝ったり」、「親しみある」とある。
集落内との違いは、物理的行為よりも精神的行為の方がよく行われていることで、特に、「料理」「手伝い」の二つが多いく、物理的行為については、全体の有効回答において、ほとんどが「直接会って」行われている。
2-2-3. 集落外のつきあいの相手との距離
高齢者の徒歩限界は徒歩で15分から30分とする（距離は約1km*1）ということから距離1km未満と1km以上に分けて、集落外の相手とのつきあいの関係をみた。1km以上の相手の家に行くのか、相手が来るのか、行き来するのか、また、足が悪いという3人含む单身高齢者の場合を特徴が見られるのか、分析した。
つきあいのある相手69人のうち42人（60.8%）が1km以上の距離に居住、27人1km未満の距離に居住。
1km未満の場合、およそその平均値は600mである。
1km以上の場合、高齢者だけをみると、健康でも、足が悪い人でも約1200mまでは歩くが自転車で、一週間に1〜2回行動している。自立して生活している上に、精神面や物理面で他の高齢者を支援している実態がみられる。
つきあいのある方法と間柄との関係を距離との関係で見ると、1km以上では1km未満より「電話」が多く、特に「以前近所だった」とは「電話」を使う人が（57人）いる。

図3  市崎木場の畑・墓地

□ 男性（非単身）○ 女性（非単身）〇 男 〇 女性（単身）△ 墓地 △ 駐車場 ■ 男性（単身） ● 女性（単身）△ 墓地 〇 バス停

※1鹿児島大学教授・工藤
※2鹿児島女子短期大学教授
※3鹿児島大学大学院 博士前期課程

Prof.,Dept.of architecture,Kagoshima univ.,Dr.Eng
Prof.,Kagoshima Women's Junior College
Graduate school,Dept.of architecture,Kagoshima univ